

地域のため、周囲の人々のため—— 多角経営で大阪を支える気鋭の経営者

建築、不動産、飲食、さらには地域福祉——『藤栄ホールディングス』は、大阪市を拠点として実に幅広い事業・活動を展開している。同社の川口社長は、様々な功績を残した祖父・藤本與治氏から事業と想いを継承。さらなる発展を目指し、2017年にホールディングス化を実現した。そんな社長の経営に懸ける熱い想いを、タレントの島崎俊郎氏が伺った。

事業と社会貢献に人生を捧げた 祖父の想いを継承する

——御社は長年この地域に根差して事業をされてきたそうですね。

ええ。祖父がこの一帯で事業を始め、もう約70年になります。祖父は『阪急電鉄』や『京阪電鉄』の沿線事業に関連する様々な開発にも携わっていました。現在もそうしたデベロッパーさんのお付き合いは続いており、たとえば当社では『京阪電鉄』系列の「ひらかたパーク」で飲食店『Dear～』を運営しています。「ひらかたパーク」は日本で最も歴史あるテーマパークですが、中に入る事業体としては当社が最古参なんですよ。

——それは素晴らしい歴史と実績です！川口社長は早くから家業を継ごうと考えていらっしまったのですか。

いえいえ、それは全くありませんでした。むしろ家業には頼らず何かをやってみたいと思っていて、22歳の時には自分で建築業を始めたんです。「花博」の解体工事やその付帯工事に携わることができ、順調に業績を伸ばしていきました。そうして24歳の時には自社ビルを買ったのですが、半年後にあの阪神・淡路大震災があり、ビルが半壊しまして……。

落ち込んでいても仕方がないので、自分で解体を行って更地にし、そこにテントと給水車を持ってきて、ボランティアの入浴サービスを提供していましたね。

——ご自身もつらい状況の中、地域のために活動をされたと！

とは言え、そのころ祖父は「西宮球場」を貸し切り、避難所として提供していましたから、足元にも及びません（苦笑）。祖父は『赤十字奉仕団』の団長や地域の社会福祉教育会の会長を40数年務め、褒章をいただいたこともあります。社会貢献にとっても関心を持ち、亡くなるまで他人に尽くす人でした。身内ながら恐れ多いぐらいなのですが、祖父を見習って私も社会貢献は常に考えています。

——本当に偉大なお祖父様です。ところで、社長が現職に就かれたきっかけは？

祖父は平成25年に亡くなったのですが、ここ数年、当社は低迷期を迎えていたんです。それまで取引先のデベロッパーさんが何かプロジェクトをする際には、1番に当社に報告がありました。しかし祖父が亡くなってからは1番から5番手になり、いつしか30番手、50番手に。それは私にとって耐え難いことでした。そんな現状を打破するため、経営を引き継ぐことになったんです。2017年には、

祖父のころから手掛けていた事業、そして私がやっていた建築業をまとめてホールディングス化し、今は一念発起、頑張っているところです。

あらゆる事業・活動に秘められた 地域や周囲の人々への想い

——では、社長が事業を推し進める上で大切にされていることは何ですか。

やはり一つは地域への貢献ですね。非営利法人として『一般財団法人 大阪教育再生支援協会』も運営しており、こちらでは子どもや保護者などへの支援を行っています。また、祖父は31年前に「柴島浄水場」に桜並木を作り、同時に『桜祭り保存会』も立ち上げていました。ここ数年は祖父や私の手を離れていたのですが、今年3月から改めて、地域振興を念頭に運営を手掛けているんです。

そしてもう一つ、運営する店舗では「四季を感じる店舗づくり」をモットーにしています。日本人として、日本特有の四季という風土風習を大事にしたい。そのため、「ひらかたパーク」内の『Dear～』、それから昨年に始めたフラワーショップ『Dear～』も、お店から四季折々の風景が見え、また各アイテムからも四季を感



After the Interview 島崎 俊郎

「これほどまでに幅広い活動を手掛ける、そのバイタリシティと実行力が素晴らしいと思いました。全ての活動に共通するのは『地域・社会貢献』という想い。そんな川口社長の掲げる『旗』に、志を同じくする多くの社員さんやスタッフさん、取引先からの信頼が集まっているのでしょう。今後さらなるご活躍を、心より応援しております！」



▲男性社員の方々を交えて

地域・社会貢献を旨とする様々な活動

本文には入りきれないほど、川口社長が行う事業・活動は非常に多岐にわたる。昨年9月には大阪・十三に『創作居酒屋 つかさ』をオープン。地域密着のアットホームな居酒屋として、既に地元民から親しまれている。今年4月には、『藤栄ホールディングス』のイメージタレントである和泉修氏（よしもとクリエイティブエージェンシー所属）が、社長プロデュースのもと足ツボサロン『Shu Izumi Salon 3S』新大阪北店をオープンした。非営利活動にも精力的だ。たとえば、社長は病気を患う子どもの支援も積極的に行っている。「私も幼少期に瞼が上らない

病にかかっており、いつも祖父が手をつないで歩いてくれました。だから子どもたちに今、私ができることをしたいと思っています」と社長は言う。また、『全国失業者更生指導本部 街商支援協同組合』にも立ち上げから携わり、現在は名誉理事長を務めている。今後、同団体は一般社団法人へと移行し、老人ホームの慰問活動なども行っていく予定だ。

あらゆる活動に尽力しながらも一切の苦勞を窺わず、さらに活動の幅を広げる構えを見せる社長。偉大な祖父譲りの奉仕の精神は、全国の経営者にとって大いに模範となるに違いない。

じられるようにと心がけています。

——フラワーショップも手掛けられているのですか！ 本当に幅広いですね。

フラワーショップは亡き祖母が花が好きだったことから始めました。店づくりは私が行い、切り盛りは妻に任せています。病院や斎場へのお見舞い用、プロポーズで渡す用……花をお買い求めになるお客様の様々なお話を、妻伝いに私も聞いています。人生の大事な場面に携わっていますので、売上云々は関係なく、本当に始めて良かったと思いますね。

——これだけの事業を牽引してこれ

た、社長の原動力とは何なのでしょう。

当社にはお世話になっている取引先、デベロッパーさんがいます。応援をいただいている以上、何らかの形として応え、恩返しをしたい。そんな想いが一つの原動力ですね。また、道なき道を歩いてく中で、振り返れば多くの社員・スタッフがいてくれました。社員がいなければ経営は到底できません。『Dear～』は学生アルバイトが中心ですが、彼女たちは私にとって我が子も同然です。皆には本当に感謝しかないですね。

——経営者として、素晴らしいお言葉で

す！ きっと今の社長を見て、お祖父様も天国で喜ばれていることでしょう。

それはないと思いますよ。「お前は何かをしているんだ」という声しか聞こえてきません(笑)。祖母が亡くなった時に「よく尽くしてくれた」と言ってもらった、その一度きりしか祖父に褒められたことはありませんから。ただ、うちの家名や血筋を絶対に汚さない、ということは常に肝に銘じていることです。今後も人として、経営者として、祖父に恥じないよう生きていきたいと思っています。

(取材／2019年3月)

『藤栄ホールディングス』
代表取締役 グループCEO

川口 晋司

大阪市出身。47歳。創業約70年を数える老舗企業を家業に持ちながら、別の道を模索し、22歳の若さで『藤和』を創業する。2017年には家業も含めてホールディングス化を行い、『藤栄ホールディングス』を設立。現在はグループCEOとして各事業を取りまとめながら、『柴島浄水場 桜祭り保存会』の会長、『全国失業者更生指導本部 街商支援協同組合』の名誉理事長を務めるなど、様々な団体にも携わっている。



▲女性社員の方々との記念撮影

藤栄ホールディングス 株式会社

大阪府大阪市淀川区東三国 1-32-18 サニーメイトビル 2F・3F
URL: <http://toei-holdings.com>

株式会社 興孫軒 / 藤本建設 株式会社

一般財団法人 大阪教育再生支援協会 大阪府大阪市東淀川区東中島 2-5-19

スイーツ&フードコート Dear～ 大阪府枚方市枚方公園町 1-1

フラワーショップ Dear～ 大阪府大阪市北区天神橋 7-1-24

創作居酒屋 つかさ 大阪府大阪市淀川区十三本町 1-4-18